

一宮市 博物館 だより

もくじ

展覧会のご案内

- 特別展「円空展」 2
- 博物館アルバム(平成 21年度) 3
- 歴史探訪 5
- 文化財保護事業 6
- 平成 22年度催し物のご案内 8

No.46 2010.3



円空・狛犬(長福寺蔵)

特別展

円空展

平成22年5月22日(土)～7月11日(日)

【休館日】5月24日(月)・31日(月)、6月7日(月)・14日(月)・

21日(月)・28日(月)、7月5日(月)

【観覧料】一般500円(4000円)、高大学生3000円(2400円)、

小・中学生2000円(1600円)

※()内は200名以上の団体料金



弁財天(個人蔵)

講演会

●日時／6月6日(日) 午後1時30分～

●会場／妙興寺公民館

●講師／長谷川公茂氏(円空学会理事長)

●定員／先着100名(無料、観覧料が必要)

江戸時代初期、全国各地を巡り、約十二万体的の神仏像を作ったといわれる遊行僧円空(一六三二―一六九五)。その慈愛に満ちた穏やかな像、また厳しさを内に秘めた激しい表情の像など、それらは庶民の信仰の対象として親しまれ、現代でも人々を惹きつけてやまないものがあります。

円空は寛永九年(一六三二)、美濃国(現在の岐阜県)に生まれ、若くして出家し、十二万体的の彫像を作ること發起して、日本各地を行脚するようになります。円空は旅をしながら、断崖絶壁をのぼり、道なき道を進み、洞窟で祈り、断食や穀物断ちを行うなどの厳しいばかりの修行をおくりました。そして、自らの作る像には自らの思い、信仰心、苦難の中にいる人々を救いたいという願いが込められていました。円空が訪れて、作品を残した地域は、地元岐阜、愛知を中心とする中部地方から北海道、東北、関東、近畿各地にも及び、神社仏閣はもちろんのこと、庶民が生活する家にも、さまざまな種類の像が残されてきました。そして、元禄八年、六十四歳で、自ら食を断ち、即身仏となり、入定したといわれています。

円空の神仏像は、全国で現在五千二百体余りが確認されており、その所在確認調査は今も続けられています。

今回開催する展覧会では一宮市に伝わる円空仏や愛知県を中心に残された約六十件を出品し、この地に残る円空をご覧いただきます。

(伊藤和彦)

特別展
牧進展「四季生生」

▼10月10日～11月29日



「四季生生図」と題された八枚組の襖絵が、市内の古刹である妙興報恩禅寺に奉納されたのをきっかけに、日本画家牧進（一九三六～）の回顧展を開きました。十五歳より川端龍子の内弟子となり、薫陶を受け日本画家の道を歩み始め、青龍社解散後は、無所属として制作活動を続けています。作家川端康成はその高い技術と美意識に目をとめ、感動を「牧進展」として記しています。半世紀にわたり日本の自然の美に身を置き、四季の変化のなかで、花鳥風月や山川草木の本質を見出しつつ、写生を基本に「美しい日本」を写し出しています。今回の展覧会は初期から現在に至る牧進展の屏風、軸物などの作品から素描まで六十四点を展示し、さまざまな日本の美の魅力をご覧いただき、大変好評でした。会期中には美術評論家草薙奈津子さんによる「牧進展の芸術」と題しての講演会も実施しました。



開会式



開会式

企画展

2009「宮市現代作家美術秀選展」

▼12月5日～12月20日

展覧会は第六十七回「宮市美術展」の成果等をうけて、二宮市美術展での各部門の依頼出品者と市長賞受賞者、ならびに各協会からの推薦者の作品をあわせて八十二点を展示いたしました。この展覧会は今回が九回目となります。館内の特別展示室、ラウンジ、講座室、展示室

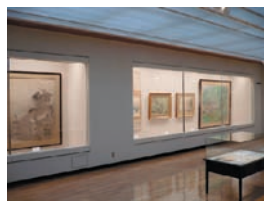


四、ギャラリーで、柔らかな光を取り込んだ落ち着いた展示室の中で、二人を越える来場者のみなさんに出品者たちのこの二年の成果を楽しんでいただきました。

玉堂記念木曾川図書館・第9回川合玉堂展
玉堂とゆかりの画人たち

▼10月17日～11月8日

川合玉堂生誕地で開催される特別展。今回は、玉堂と共に、親交のあった画人を紹介。大垣の出身で、玉堂とは逆に東京から京都画壇に転じた同い年の坂井藍涯、その長男で玉堂に師事した坂井青泉、玉堂の心の師である岐阜市誓願寺住職・雄山瑞倫の紹介で入門した佐々木尚文。そして、上京以来生涯にわたり親しくした横山大観・川端龍子など近代日本画の巨匠たちの作品を展示しました。



山合玉堂生誕地で開催される特別展。今回は、玉堂と共に、親交のあった画人を紹介。大垣の出身で、玉堂とは逆に東京から京都画壇に転じた同い年の坂井藍涯、その長男で玉堂に師事した坂井青泉、玉堂の心の師である岐阜市誓願寺住職・雄山瑞倫の紹介で入門した佐々木尚文。そして、上京以来生涯にわたり親しくした横山大観・川端龍子など近代日本画の巨匠たちの作品を展示しました。

企画展

くらしの道具・今と昔

▼平成22年1月9日～2月28日

本展覧会は、歴史を学び始める小学生を対象に企画し、今回で十八回目となる展示です。市域を中心とした衣食住の民俗資料を展示し、今の暮らしの道具と比較してもらうのを目的としました。また、木曾川上流山間部、知多半島・渥美半島海浜部の自然環境が異なる地域の資料と比較することにより、地域による生活道具やくらしの違いについても紹介しました。

●会期中の催し

海のくらしを体験!



●1月17日(日)
ゴンドウ汁やシラスメシなどを味わい、海の落とし物(貝殻や砂など)で自分だけの作品を作ったり、干ダコ作りにも挑戦しました。(参加者 250人)

●1月31日(日)
ホウバメシトウジソバ、ゴヘイモチ、ヘーモチなどを味わい、木曾の木でコマ作りをしました。(参加者 336人)

山のくらしを体験!



平野のくらしを体験!



●2月14日(日)
クド(カマド)で炊いたおいしいゴモクメシ。昔はおやつとしてよく食べたセンバヤキを味わいました。(参加者 193人)

講演

尾張平野を語る14
「尾張の学問と文化展開」

▼平成22年2月28日・3月7日・14日の各日曜日

これまで、本講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野特に尾張平野について考えてきました。

十四回目となる今回は、江戸時代の尾張で展開された学問と文化をテーマに、地域の歴史を見てゆきました。



●内容

① 2月28日(日)

「尾張の絵画史―東西のはざまに咲いた華―」

豊田市美術館館長 吉田俊英氏

② 3月7日(日)

「尾張の本草学と洋学」

愛知大学非常勤講師 遠藤正治氏

③ 3月14日(日)

「尾張藩における国学の展開」

名古屋芸術大学教授 岸野俊彦氏



●6月7日(日)
「君も風流人になる!」

日本画の技法を学び、実際に水墨画を描いて軸装したり、岩絵具で絵絹に絵を描きました。

市内の小学校四～六年生を対象に、歴史・民俗・考古・自然・美術などの多様な分野を総合的に学ぶ講座です。今年度後半は、「君も風流人になる!」を実施しました。

Museum Kids Club

▼通年

●内容
○島文楽・演目／
「傾城阿波の鳴門」巡礼歌の段」
○宮後住吉踊・演目／
手踊(深川・すがわき・豊年・五十三次・かづぼれ・音頭)

一宮市博物館では、これまで市内に残る民俗芸能の公演を行ってきました。今年度は先年に引き続き、市指定無形文化財の「島文楽」(昭和三十六年三月二十七日指定)と「宮後住吉踊」(平成十二年六月二十二日指定)の公演を行いました。

公演
民俗芸能公演

▼平成22年3月27日



葉栗北小学校の
青山三菜さん・三優さん・三弥さん
井北小学校のみ
なさんに、エドヒ
ガンシダレザクラ・
ヤマザクラの名称
と管理番号を木
曾ヒノキの板に
書いてもらい、取
り付けました。

国指定名勝及び天然記念物「木曾川堤(サクラ)」には、平成十三年度の植樹に伴って樹種を示す名札を取り付けましたが、割れてしまったものも少なくありません。そこで、指定域に面している北方小学校・葉栗北小学校・浅井北小学校のみ

木曾川堤(サクラ) 保護活動

▼3月6日



学びました。初心者の方は慣れないくずし字に最初は悪戦苦闘でしたが、講師の先生や2・3回生の方たちとともに、和気あいあいとした雰囲気の中で古文書の勉強をされていました。

平成二十二年二月十三日、年間十回の講座をすべて終了しました。本年度は、河田方区有文書をテキストとして使用しました。講座では、中島郡河田方村の家並絵図や人別改帳、村方所用留帳、村定留帳などを通して、古文書の解説と江戸時代の人々の暮らしや生活文化について

古文書講座

▼平成21年5月～平成22年2月



市民の皆さんに、私たちの郷土の貴重な財産である文化財を紹介して、文化財愛護の精神を高めていただくために、昭和四十二年以来毎年「市民文化財めぐり」を開催しています。
四十五回目になる今回は、浮野古戦場跡を皮切りに、浄蓮寺山門・重吉八幡社・長福寺・三ツ井稲荷山古墳・妙興寺・博物館(特別展「牧進展・四季生々」見学)という市の東部から南部に存在する指定文化財を中心として見学するコースでした。二十三名の参加者の方々は、それぞれの文化財を講師である文化財保護審議会委員からの解説を熱心に聞き入っており、秋の一日、市内の文化財への思いを新たにさせていただきました。

市民文化財めぐり

▼11月6日



(上・右) 防火パトロール 妙興寺



石刀神社防火訓練



昭和二十四年二月二十六日に奈良法隆寺の金堂壁画が焼失しました。以来この日を「文化財防火デー」と定め、防災意識を高揚のため各種行事を開催し、今年度は五十六回目にあたります。
市教育委員会は消防本部とともに二月二十日に文化財管理者宅での防火、消防設備点検をする文化財防火パトロール、同二十六日には防火訓練・文化財管理者研修会を実施しました。防火訓練は石刀神社(今伊勢町馬寄)において石刀神社関係者、地元自主防災会、町内会、市消防職員などの方々が中心となつて行われ、地元の市民・保育園児・幼稚園児など多くの参加がありました。

文化財防火パトロール

▼1月20日

文化財防火訓練

▼1月26日

服部牧山と「耕余清宴」

◆服部牧山

江戸時代後期、大赤見村には二つの服部家があった。この二つを通称西の服部家、東の服部家という。西の服部家には、庄屋役などを勤めた弾輔（八〇七―八四六）があった。弾輔は、有隣舎の主鷺津益斎（八〇四―一八四二）に学び、漢詩人としても赤城の名で知られる人物である。

服部牧山（八二二―八六二）は、この西の服部家から分家した東の服部家の者であった。分家の時期は、享保年中（七六―七三六）で、分家当初から質屋商売を行っていたという。名を親将、字を士廉、牧山といい、はじめ平一郎、通称を喜左衛門、後に勘七郎といった。

天保五年（八三四）二月十四日に庄屋役見習となり、翌六年（八三五）六月二十二日には庄屋本役となつて、同月二六日に名を喜左衛門と改める。そして、安政四年（八五七）三月十日には庄屋役を退役し、村方年寄役となった。

その間、牧山は成瀬隼人正御出入や小牧宿出役并同宿本陣代、大江兼新般若井組惣代役、浅野村庄屋仕埋（後兼帯庄屋）、馬見塚村庄屋仕埋、御供所村（現大口町）兼帯庄屋などを勤めた。

こうした功績などで、尾張藩から苗字帯刀永代御免、宗門自分一札孫代迄御免、御能拝見永代御免、年頭御目見一代限御免、名披露御目見一代限御免などの特権のほか、褒美を得ている。

牧山も先の弾輔同様、村政などに関わる傍ら、益斎に学び、漢詩をよくして有隣舎の門人らと交流した。

◆尾陽不休社と種徳堂

尾陽不休社は、有隣舎に関わる人々を母胎として発足した文化サークルである。それは学問の場である有隣舎とは異なり、文雅を享受する場であった。

メンバーは鷺津益斎を長として、その子である穀堂（八二五―八八二）、服部赤城（弾輔）、服部牧山のほか、真清田社神職の森有斎（生没年未詳）、丹羽村東光寺住持の坦道（八〇六―一八七四）、大赤見村裁松寺住持の桂岸（桂巖とも、八二一―一八七二）、宮村の医師で漢詩人としても知られる森春濤（八九―一八八九）の八名であった。

牧山は、このメンバーをその種徳堂に招いて、耕余清宴という文雅のいとなみを行ったという。不休社によるこのいとなみは、天保十一年（八四〇）十月に始まり、同十三年（八四二）十月に終わった。不休社の活動が短いのは、益斎が亡くなったためと考えられている。しかし、耕余清宴は、その後も継続されていたようである。

◆その後の耕余清宴

天保十三年以降、年代が確認できる「耕余清宴」は、八回開催されている。その年月日を

整理すると、嘉永三年（八五〇）十二月七日、同四年（八五二）九月十日、および十一月七日、同七年（八五四）十二月十六日、安政三年（八五六）十一月七日、同五年（八五八）十一月七日、同六年（八五九）十二月七日、万延二年（八六二）二月三日である。

日付に注目すると、十一月七日に開催されることが多い。嘉永七年の開催も、当初十一月七日に予定されていたが、大地震（十一月四日に発生）のために延期となったのである。また、年未詳の記録にも、三回が同月日で開催されている。その理由は、未詳ながら、何か意図的にこの日付で耕余清宴が開催されていたと考えられよう。

一方、嘉永四年開催の耕余清宴記録からは、集まった人々の名を知る事ができる。参加者は、先の不休社メンバーである森春濤、坦道の他、真清田社七代神主の佐分但馬守清伯（七七―八一八五）、同八代神主佐分右京（一八七〇）、同神官林筑後守秀易、二宮村庄屋の林彦九郎などであった。

これらの人物は、耕余清宴の会とは断定できないものの、牧山の開催した釜日（茶会と考えられる）などにも参集していた。牧山の豊かな人的ネットワークを垣間見ることができ

こうした人々が、集まった耕余清宴は、二日以上におよぶ事もあった。昼、夜、朝には、食事を出されている。その一例を挙げれば、松露（き



有隣舎同人琴棋書画の図（『種徳堂画帳』より、個人蔵）

のこ）とつくしの入った吸物やぼろとかぶらの煮付け、蓮根とねぎの白胡麻赤味噌和えなどで、酒もだされている。こうした食事や酒を饗して、牧山らは文雅のいとなみを行っていた。

＜主な参考文献＞

- 山本和義「河野みどり」『尾張野の文雅』二（『アカデミア文学』語学編第五号）所収一九九一年
- 同「尾張野の文雅」二（『アカデミア文学』語学編第五号）所収一九九三年
- 山本和義「尾陽不休社の詩人たち」『文学第十巻第三号』所収二〇〇九年
- 二宮市史西成編『二宮市史上巻』
- 二宮市史下巻『二宮市史下巻』
- 「真清田神社史」
- 「新編二宮市史資料編十」
- 「宮市博物館」企画展「維新前後の地方文人」展示図録
- 「宮市博物館」企画展「茶の湯の浸透」解説書

《付記》本稿を作成するにあたり、服部親將氏には多大なるご教示、ご高配を賜った。また、山本和義氏にも種々ご教示をいただいた。末筆ながら、深謝申し上げます。（坪内淳仁）

保存修理後の本尊正面



保存修理前の状況



木造如意輪観音菩薩坐像（二宮市指定文化財・妙興寺蔵）

◆菩薩・観音菩薩とは

菩薩とは、自らは仏となろうと悟りを求め、他者には救済を行い悟らせようとする者です。出家前のお釈迦様の姿である王族や貴人の形で表されることが多く、宝冠や耳飾、首飾、ブレスレットなどの装身具を付ける華やかな容姿を持つ例が多見されます。

菩薩の中には、弥勒菩薩、観音菩薩（その他の変化観音あり）、虚空蔵菩薩、地藏菩薩などがあります。主尊として単独で表される他、脇侍として三尊のうちの二尊としても表現されます。すなわち阿弥陀三尊のうちの観音菩薩・勢至菩薩、釈迦三尊のうちの文殊菩薩・普賢菩薩、薬師三尊のうちの日光菩薩・月光菩薩が一般例です。

その中でも観音菩薩は、古来より多くの人々から信仰され、最も親しまれている菩薩でしょう。市域にも絵画や彫刻などで数多くの作例があります。観世音菩薩や観自在菩薩とも呼ばれ、多様に変化してあまねく衆生を救済するとされ、聖（しよう）観音を基本形象として、様々な変化観音が存在します。千手観音、馬頭観音、十二面観音、不空罽索観音、准胝観音、如意輪観音がその例となり、それらは六道思想と結びついて六観音（前述の聖観音から順番に、不空罽索観音と准胝観音をお互いに排他として）と呼ばれることもあります。また、『法華経』普門品（ふもんぼん）（観音経）に観音菩薩が三十三に姿を変えて人々を救済するために出現するとあり、観音霊場の三十三所などの数にその影響を見る、ことができます。

◆妙興寺如意輪観音菩薩像の概要

妙興寺客殿の本尊で、温るかつ端正な容貌を備え、生命感や人間的な魅力を感じることができます。同じく仏殿の本尊で木造釈迦三尊坐像を参考に室町時代初期に造られたと言われています。如意輪観音の典型である二面六臂像で、その名の由来である、意のままに宝を出す珠で人々を救済する「如意宝珠（いこうじゆ）」と煩惱を打ち砕き、仏法と人々を守護する「輪宝（りんぼう）」をその手にとります。頭を右に傾けて右の第二手を頬にあて思惟し、第二手は腕を曲げて右胸前で掌を上如意宝珠をとり、第三手は軽く腕を曲げて右大腿部横で手を下に数珠を下げます。左第二手は腕を下に伸ばして台座に触れ、左第二手は腕を曲げて、掌を前にして未開敷蓮華みかいふんげ）をとり、左第三手は腕を上曲げて、掌を上にして輪宝をとります。左足は膝を曲げて、腹前でかかとを引いて足裏を見せ、右足は膝を立てて甲を上にし、左足裏に右足裏を合わせた輪王坐（りんおうざ）をとります。松材の寄木造で表面に金泥が施され、衣部に切金文様が配され、目に玉眼を嵌め入れ、眉間に白毫相（びやうこうそう）を表します。左肩部から条帛（じょうはく）をかけ、腰には裙（くん）を巻き、両肩からは細長く天衣（てんい）を掛けます。頭部に髪を結い上げた髻（けい）を表し、銅製鍍金の宝冠・垂冠帯を戴き、胸部に環珞（ようらく）を長く下げる胸飾を付け、上腕部に臂釧（ひせん）、手首には腕釧（わんせん）を付けます。

一宮市では文化財の管理、修理等の保存活用に要する経費の一部を一宮市文化財保護条例に基づき補助金を交付する等の保護活動をしています。ここでは、今年度に保存修理された文化財の一つを紹介します。



保存修理後の本鉢左側面



保存修理後の本鉢背面



保存修理後の本鉢右側面

◇保存修理

今回の保存修理は京都市の財団法人 美術院で行われました。像本鉢の主な修理は、左肩外側材と左腿部材が体部材とはぎ目で隙間を生じ、鏝や釘も劣化していたので、鏝を除去し生漆を塗布し、必要のない釘を除去し釘穴を埋めてから、部材を漆で接合しました。左第二手は前腕部のはぎ目で脱落していたのを漆ではぎ付け、後補の全指先を松材で補足し、左第三手の全指先も像容に合うように修整しました。右第二手は緩みを腕の根元にて膠で止め、後補である一部の指を外して補足しました。右第二手と同第三手にあつた指先の欠損部を木屑漆で修整しました。裳先欠失、両足先の後補が見苦しかったので、松の材で裳先と両足先を像容に合うように補足し修整しました。持物の如意宝珠や蓮華は剥落止めを行い、銅製の輪宝は後補で、像に対して小さいため別保存とし、今回は松材の漆箔仕上げで新たな輪宝を造りました。頭部の宝冠の歪みを修正し元に戻しました。像各部に存在した金泥彩や漆箔の浮き上がりの剥落止めを行いました。像本鉢と同じく光背や台座も適宜、補足修整、剥落止め、新補や部品の正しい位置への取り付けなどを行い、台座・光背・尊像の安定を図るため台座に中棧を設け、蓮肉上面穴まで通る心棒を新たに設置しました。また、修理箇所は全て古色仕上げを行いました。



(上段) 保存修理中の台座蓮弁
(下段左) 保存修理中の本鉢部分
(下段右) 保存修理前の本鉢

◇保存修理が完了して

今回の保存修理により、修理前の腕が外れてしまっている等の痛々しい姿から見目麗しいお姿に戻りました。今回の修理に関った「担当者としては、久遠に渡って私たちを見守ってくださる一助ができたのではないかな」と思っております
(齋藤晶)

〈主な参考・引用文献〉

『修理解説書』
「宮市教育委員会編」『宮の文化財めぐり 増補改訂版』二九九九
井上・稔編『日本の美術五 如意輪観音像・馬頭観音像』二九九一
猪川和子編『日本の美術三 観音像』一九八〇
奈良国立博物館等編 図版目録『西国三十三所 観音霊場の祈りと美』二〇〇八
山岸公基「妙興寺仏殿本尊釈迦如来及び両脇侍像調査中間報告」(愛知県史研究編集委員会編『愛知県史研究 第八号』所収) 二〇〇四

平成22年度催し物のご案内

※詳細は市広報・ホームページ、または博物館までお問い合わせ下さい。

展覧会

書道芸術家 亀山雪峰の書芸展

▼5月1日(土)～5月16日(日)

伝統書法を基に、時代に即した書「彩色書」を創作された書道芸術家 亀山雪峰氏の作品を展示します。

特別展 円空展

▼5月22日(土)～7月11日(日)

日本各地を巡り、あまたの像を残した円空。刻まれた神仏像の迫力あるすがたは、現在でも多くの人々を魅了し続けています。本展覧会では、県内に伝わる作品を中心に展示し、円空作品の魅力に迫ります。

2010 一宮美術作家協会展

▼8月28日(土)～9月12日(日)

一宮美術作家協会会員による最新の発想でイメージの試作を展開した絵画・平面、彫塑・立体、デザイン、工芸の力作を展示します。

一宮写真協会展

▼9月16日(木)～9月26日(日)

感性に裏打ちされた表現力で、熱い思いを込めた写真作品を展示します。

特別展 木曾川をめぐる人と文化

▼10月9日(土)～11月21日(日)

木曾川は長野県木曽村を源流とし、岐阜県、愛知県、三重県、そして伊勢湾へと

講座

通年 講座 古文書講座

▼平成22年5月～平成23年2月

一宮市博物館で保管している江戸期の古文書をテキストとして使用し、古文書の読解力を養うと共に、その歴史的背景を学びます。

通年 講座 Museum Kids Club

歴史学や民俗学、考古学、自然、美術などに興味のある子どもたちを対象に、総合的に学ぶことを目的とする活動。見学会・体験学習などさまざまな活動を盛り込み、考え方を育てます。

講座 尾張平野を語る15

▼2月27日(日)・3月6日(日)・3月13日(日)

本講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野―特に尾張平野について考えてきました。今回は織物そのものや使われた道具、その生産にかかわる社会的背景など、広い視野から織物生産をとらえ、当地域の特徴を学びます。

講座 市民文化財めぐり

▼11月初旬予定

市内にある文化財のうちいくつかを、文化財保護審議会委員の解説により観覧します。

公演 民俗芸能公演

▼3月27日(日)予定

一宮市指定無形文化財の公演を行います。

利用案内

【休館日】毎週月曜日、休日の翌日
 【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)
 【観覧料】(常設展・聴講料含む)一般200円(160円)、
 高校・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)
 ※()内は20人以上の団体料金
 ※一宮市内小・中学生は無料
 ※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料
 ※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料



【交通】名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南出口より徒歩7分
 ニコニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分



第46号

発行日/平成22年3月31日
 編集・発行/一宮市博物館
 印刷/三井堂株式会社

〒491-0922 愛知県一宮市大和町妙興寺2390
 TEL0586-46-3215 FAX0586-46-3216
 URL <http://www.icm-jp.com/>